

洪水の標

洪水の水位を示す標（しるし）が各地に残されています。それを見ると、先人がどれだけ洪水に苦しめられてきたか、洪水を安全に流すためにどれだけ努力してきたかを知るきっかけになります。高知県四万十市と徳島県吉野川市の洪水の標についてご紹介します。

■明治23年の洪水標（高知県四万十市）

明治23年（1890）9月9日午後3時頃から降雨が始まり、11日には豪雨となりました。四万十川、後川の水量は増加し、中村町（現四万十市）では低地はもちろん上町、本町辺りも瞬く間に浸水しました。階上、高所に揚げた家財道具も浸水し、人々は堂社に逃れ、墓地山間に露宿するなどしました。避難途中に船が転覆して9人が死亡する事故も起こりました。中村町の被害は田損地86町余、畑損地70町余、変死人13人、本家流失45戸、全倒13戸、半倒13戸、大破279戸などに及びました。この洪水は後に渡川改修工事の計画対象洪水となりました。上流の西土佐村（現四万十市）口屋内の鶯（はいたか）神社の石段に、明治23年の洪水標が建てられています。石段の下から42段目にあたります。＜西土佐村史編纂委員会編「西土佐村史」1970年、中村町編「中村町風水害史」1938年、中村町役場編「中村町史」1950年）＞



■大正元年洪水の標柱（徳島県吉野川市）

大正元年（1912）9月22日夜半前に台風が徳島県南の海岸をかすめて、阪神地区に上陸しました。吉野川は大水害となり、海岸は高潮に見舞われました。徳島平野は見渡す限り一面泥の海と化し、三日三晩屋根の上で水の退くのを待っていた人の話も伝わっています。県全体の被害は死者81人、負傷者53人、行方不明14人、住宅の全壊426戸、半壊796戸、床上浸水26,708戸、床下浸水16,359戸などに及びました。吉野川第一期改修工事（明治40年～昭和2年）の完成を記念する吉野川市の改修碑の横には、大正元年の洪水の痕跡を示す標柱が立っています。標柱の側面に「八尺七寸」と刻まれており、この辺りで約2.6m浸水したことを伝えています。＜建設省四国地方建設局徳島工事事務所編「吉野川百年史」1993年、徳島地方気象台編「徳島県自然災害誌」1997年など＞

